

亀の岩での決意

和男は懐かしの 亀の岩に腰をおろして、眼下に炭鉱の生活広場にむらがる豆粒程の人々を眺めながら『家族』とは言え、人には、それぞれの人生がある。 姉には姉の、母には母の、自分にも、健にも…。』と、思った。

そして個人の力ではドウにもならない、『炭鉱が閉山に向う』等と言う、世の中の流れの厳しさを背中に感じながら、『自分は移民をしない！』『母の老後は俺が看る。』と、心に決めた。

思い切って、ころころを決めてみると、何だか東京から ズット引き摺って来ていたガオスが晴れて、心の中がスッキリと片付き、そして 身体も軽く成った。

和男は立ち上がって、大きく背伸びをし、そろそろ 家に帰ることにした。ブッシュを抜け、亀の岩の下を抜けると、傾きかけた太陽を右手の峰の上に観ながら、家に向った。

和男が家に着くと、間もなく健も帰って来たが、健は望遠鏡を買って来ていた。「ブラジルは広かけん、望遠鏡の必ずいって(要ると)四郎さんの云わしたけん」と、健は自慢げに とくとくと説明をした。

「金はどうした？」

「……………」

「健！ 金はどうしたんだ！」

「…………… 授業料で ……………。」

「今朝母さんに貰った、学校の授業料で買って来たんか！ 馬鹿やろう！ 返してこい！」

「どうせ学校ば ヤメるとじゃろうもん！」

「馬鹿タレ！ 誰がブラジルに行くと言った！ お前は学校を卒業するんだ！」

「……………」

「お前はもう子供じゃあないはずだ。 少しは考えて見ろ！ そんな事も分かんのか！」

「四郎さんの もう炭鉱は終わりに なるって ……………。」

「四郎が 何と云おうが、お前はお前だ！」

「……………」

健は黙ったまま、不満そうに和男をにらみつけた。

「おいも(自分も)もう子供じゃあなか、そんならいは 分かっとる！ バッテン卒業しても、採鉱冶金科はナニ～もならん。そいに、もう石炭は時代遅れやて！ 兄者は、東京におる(居る)けん、知らんやろうが、石炭は『モウ 駄目や』って！」

「駄目なもんか！」

「いんにゃ(否) 四郎さんのソギャン(そう云うふうに)云わしたと！」

「四郎が云えばお前は何でも信じるのか！ 四郎、四郎って云うな！ 何だあんなロクデナシ！」

健の目がキラリと光った。

「兄ちゃんは 四郎さんば知らん。そりゃあ たしかに、見た目はロクデナシかも知れん。女たらしで、よっぱらいで、怠け者かも知らん。そいどん(だけど)四郎さんはそいだけじゃあなかと。ドガンデン(ものすごく)勉強ばしとらすと、本ば読んどらす(読んでいる)と。何でン知っとらす(知っている)。時代の流れば知っとらすよ。」

「馬鹿野郎！」

和男は怒鳴りあげると いきなり健を殴った。健の唇は切れて 血が流れた。健はビクともしないで、大きな身体を和男の前に突き出し、流れおちる血を拭こうともせず、和男を睨みつけている。

四郎という男は、中学二年生の時 佐賀市内の中学から 和男のクラスに転校して来たのだが、頭脳明晰で中学・高校と(さほど勉強をしている様子もないのに) 入試の模擬試験などの成績は、いつも学年のトップクラスに名をつらね、成績優秀者として壁に張り出されていた。

だが、高校を卒業すると、大学への進学には見向きもしないで、事務職として炭鉱に就職をしている。そして二年後、一連の事務処理の仕事を把握するや 四郎は労組の上司の心を掴み、労組主催の催事の度に刈り出され 見事な企画を提案して、頭角を現し始めていた。

<労働組合の集会では>

四郎の演説は鋭く、時にはウイトを交えて巧みに人の心を掴み、敵対者の『弱み』を衝いて黙らせ、自分の主張の正しさを説得しては 共感を呼び、着実に見方を増やす人気者になっていた。(やっと、20才=ビックリの囑望された若者！)

四郎は小柄だが、しっかりとした体格の若者。その若者が 凜とした声で、誰しものが、一度は耳にした事が有る世界的に有名な 学者や政治家等の主張を引っ張り出して『今のままでは 絶対にダメ! ですよ。』と演説をされれば、九州の山の奥で炭鉱だけを頼りにして、地底に潜り、石炭を掘り出して生計を立てる人々には、『ハハッ!』と 頭を下げて従うしかない。

(それは、それでいい。)

しかし、四郎が早くも結婚をし、子供が出来たと云うのに、嫁と赤児を追い払い、以降昼間から、酒を飲みあるき、ぶざまな姿を晒している。(『恥ずかしい』とは、母からの手紙) たしかに 四郎は頭が良かった。だが、一方で 人の隙をうかがい、機を見て自分の『利』をむさぼると云った『蛇』の様な陰険なところが有った。

現に和男が今回の帰省で 多久駅を降りて、最初に出会った知合いが、四郎だった。四郎は噂の通り(母の手紙)昼間から酔っていた。

四郎は『取材に歩いている途中』だと言った。組合から出している新聞の取材と云うことだと思いが、この新聞には 山で働く労働者たちに 可成りの影響力をもっていた。この新聞に 下手な事を書かれると、『近在の山には住めなくなる！』と、まで云われていた。だから、会社の幹部らも、組合の幹部も、オベッカ(袖の下・情報提供・多少の便宜…等々)を使っていた。

和男はアザミが丘の炭住の風呂にも、その新聞が置かれているのを見た。トップには秋期闘争の報告が掲載され、社説には『組合員は団結せよ！』と云う見出しで、『団結さえすれば、もっと強く 生活の向上を会社に申し入れる事が出来る！』『我が鉱業所は他社にくらべて労働者の待遇が良くない！』等、滔々とアジ演説をとばし、給料は勿論、閉山にたいしても、傘下の他所の鉱山に配置すれば、失業することはない。だが、この配置転換の構想も、職員(事務系)のみを対象に配慮されている。これは、鉱員の団結が弱い証と云える。…等々と。解りにくい『そうですか。』と言うことになる。

そして、裏面には『唯物論の研究』と云う厳めしいタイトルで 民主社会主義について、堂々と論じ上げた 連載記事が掲載されていた。

これを見て、和男は いかにも四郎のやりそうな事だと思った。組合員の殆どは こうした記事は読まないだろう。世間話やゴシップには興味があっても『論文』や『解説』等には興味がないからだ、まして『唯物哲学』などという、バカデカイ物を振り回されれば、誰もが、拘るのは面倒だし、『太刀打ち出来ない物』・『すばらしい物』として、平伏するしかないのだ。

こうした事を見越した上で、わざわざ『ラッサール』や『ベルベール』を持ち出して、自分の身をより強固に守ろうとする 相変わらずの猾い(ズルイ)やり方に和男は腹が立った。編集長は別に居るだろうが、実際には 四郎が牛耳っている様子が 手に取る様に伝わって来た。和男は健を殴ってしまってから、健が四郎に服従するのも無理もナイ事だ と思った。

「健、お前は四郎を 大変力の在る人間だと思っているだろう。だが、あいつはヨタ者だよ。」
「……………」

「社会主義を振り回している 暴れ者だよ。マルクスにしたって、レーニンにしたって、何とかして世の中を良くしよう、一人でも多くの人を幸せにしたい、と思って戦った人だよ。あんな暴れ者じゃあないよ。もっと真面目で、真剣な人達なんだよ。」

「……………」

「四郎はいろいろな事を知っているかも知れない。しかし四郎はマルクスのことも、レーニンのことも、その他の事も本当の事は何一つ解ってはいないんだよ！ 解っていれば、あんな生活はしないし、出来ないはずだよ。四郎は組合員の為に身を粉にして戦っているか？ よく考えて見ろ！ 解っていれば、あんな生活は出来ないだろう！ 昼間から酔ってる闘士がいるか！

あんな奴は社会のダニ！、労働者の吸血鬼だよ。それでもお前は四郎を尊敬するのか！」
「……………」

健はまだ和男を睨み衝けたまま黙って立っていた。

「殴ったのは 悪かったが、俺は、もう少しお前に大人になってもらいたいよ。お袋の真面目な生活ぶり、四郎の生活ぶりを 比べてみろ！ お袋は懸命に働いて組合費を払っているんだぞ！ 四郎はその金で昼間から『ヨッパライ』だぞ！ それでも俺の云う事が聞けないのか それでも、四郎が正しいと思うなら 俺をなぐり返せ！ 遠慮は無用だ！」

和男は『さあ 殴れ！』と、奥歯を噛みしめると健の前に立った。健は 暫く黙ったまま、ジッと和男の目を見ていたが、意を決したのか ぶるぶると身体を震わすと、大きく目を開きカIPPパイ和男の顔を殴り、振り向きもせず『バタン！』と玄関の扉を閉めて出て行ってしまった。

健が放った拳(こぶし)でのパンチは強烈だった。和男は間違いなく『顎を飛ばされた！』と思った。当然和男は失神をして、その場に倒れ込んでしまった。

気が付くと、和男はすぐに自分のアゴの存在を掌(手のひら)で確認をして、(下アゴは有った)安心して立ち上がろうとしたのだが、歯茎には激痛が走り(下アゴの前歯2本が、根元から折れて、口の中にコロガっていた)足下は不安定で覚束なく、なかなか立ち上がれなかった。

健はその夜、帰ってこなかった。

母は『大の大人(おとな)の兄弟が ……。』と、和男の負傷の手当をしながら 涙した。和男は『申し訳ない！』とは思ったが、『健は俺が救わなければ！』と言う気持ちの方が強かった。母は『健は今夜 何処で眠るの？』『文無し(文無し)の健は キット何も食べないでいるのよ！』結局母は、健の事を一晩中心配をし続け 一睡もしないで、夜を明かしたようだった。

和男は昼になっても帰って来ない健の事が少し気になって、アザミが丘の集会所に行ってみることにした。集会所への近道は、市場の小さな広場(ぶらんこ、シーソー、滑り台等を設置)を抜けて、組合の事務所周りの細道を通れば、集会所への近道だった。

和男は事務所周りの細道を通るとき、窓越しに健をみつけた。
「健！」

和男は事務所に入っていった。事務所といっても工事現場のプレハブの様な簡素な建物である。健は組合の職員が時々寝泊まりをする部屋で、四郎と囲碁を打っている最中だった。「よう！カズさんか、ヤッパリ山は良いだろう！」四郎が上からの目線で 声を掛けてきた。

和男は軽く手を挙げて会釈をし、黙って碁盤の脇にあぐらをかいた。部屋の隅にはうすよごれたフトンがへし折ったまま、引き寄せてあり、壁際には、たばこの吸いながら詰め込まれた湯呑が、置いてあった。

小さな机の上には、謄写版(謄写版)が一台置いてあり、辺りには ざら紙(ワラ半紙)が散らばり、謄写版の赤や黒のインクが、ところどころ 縁ナシの畳を染めていた。そして壁には「団結せよ！」・「反動的な階級の…。」・「…反対！」・「…生産階級の代弁者！」・「…反対！」・「…生産階級の団結！」・「反動的な階級の…。」々『滅私突撃』の勇ましい文言が、壁にも、天井にも、踊っていた。

囲碁の勝負は明らかに四郎が勝っていた。

「また負けた！」健はそう言って、手に持っていた石をザラザラと函に戻した。

「健、おふくろが心配している。うちに帰ろう」

「兄ちゃんは卑怯モンだ！きのう云うた事ば、四郎さんに云うて見ろ！」

健はまだ、腹をたてている様子だった。

「おいおい、兄弟げんかは やめんか。カズさんが なんて云うたか知らんが…。兄弟げんかはいかん！」

「……………」

和男は健が非情にあわれに見えた。こうした法外に散らかった雰囲気を好んだ時代は、自分にもあった。『太宰治』を 盛んに読みあさっていた頃だっただろうか？ 意識的にだらしない生活を夢見た事がある。

「カズさんは 東京で良い生活をしているから、何とも思わんじゃろうが、社会主義の発展は何者にも抑えることは出来ないんだよ。その意味では、健さんの方がオトナだなア〜」

「……………」(和男は(始まったナ)と、思いながら、黙っていた。

「なあに、今は俺達も、コゲな ぶざまな生活ばしとる ばってん、いつまでもこぎゃん生活ばしとるんじゃあ ナカと！」

「……………」

「とにかく、日本の社会主義的思想は ヨーロッパの十九世紀の状態じゃからなあ ……。100年遅れとる。」 四郎は独り言の様に呟いた。

「そうかなあ？」と、和男。

「そうかなあって、そうじゃあないか、メーデーがインターナショナルの決議に基いて実施されたのは、何時だったと思う？ 1889年だよ。労働者階級の成長を誇示せんとする、自発的なデモンストレーション」だよ。法律で定められたものじゃあない。ばってん、労働者が、自分たちの権利を守る為に デモを行ったゼネストの日だよ。そう言う意味から云えば、『日本はまだ1889年までいっていない。』とさえ云えるんだよ。」と、 四郎は 国の行く末を憂いている政治家の様なことを口にした。

四郎はこう云う話になると、次から次へと色んな記憶が蘇って来ると見えて、止めどなく滔々としゃべる。和男も四郎の滑らかな弁舌に、危うく圧倒されそうになった。

健は『それ見た事か！』『何も言えないじゃあないか！』と、云わんばかりの目付きで和男を見据えていたが、和男は黙って聞いていた。

「日本とドイツとは非情に似ていると、云われるが、ナルホド、本当に良く似ているよ。だが、よく似てはいるが、ドイツには『実践社会主義の育ての親』と云われるベーベルがいた。日本にも あんな人がいないといかんよ！」

四郎は『ドウダ！参ったか！』と云わんばかりの顔付きで 和男を見据えた。

少し間を置いて、和男が口を開いた。「そうだなあ。そうかも知れないな」と、相槌を打った。四郎は和男のこの『相槌』(ベーベルを持ち出した自分の見識に驚きもせず、自分と対等な態度での反応)が気に障ったらしく、『負けては、ナラジ!』とばかりに対決する言葉を返して来た。

「和(カズ)さんが どれくらいベーベルの事を承知か知らんが、同感してくれる同士が此処にも1人居たと、分かっただけでも 俺は嬉しいよ。今日は 思いがけなく 良い日になりそうだ!」と、相手をトコトン見下げたコメントを返してきた。

和男は四郎の空虚な演説を(チョット待て!と遮りたかったが)黙って聞いていた。「ああ云う時代は素晴らしい様に見えるだろう。しかしそれは素人考えだ。決して楽ではなかった。どんどん社会主義が広まったかと思うと、それは間違いだ。その証拠に帝国議会選挙で一変に 38の議席を失った事もあったのだからなあ!」と和男の顔を見てニヤリと笑い顔を作って余裕を見せた。

和男は四郎の態度(オイラが大将・お前は家来)に 今度は少し腹をたてた。

「社会主義に、素人も玄人もあるもんか!」

「カズさん、そう むきに成るなよ。俺が言いすぎた、謝るよ。素人でなくてもいいよ。とにかく世間の人には知らんのだよ!」

「世間の人には知らないかも知れん。しかし四郎、お前だって その先は知らんだろう?」

今まで 鋭い反撃を受けた事のない四郎の顔には 一瞬オドロキの動揺が走った。

「たしかに 1907年の帝国議会選挙では、社会民主党は38の議席を失っている。だが、得票数は、さらに増大しているんだぞ!」

そんなことを捕まえて『世間の人には知らんのだよ!』なんて、さも偉そうな口をきくな!」四郎はギクリと、したような目で和男を見た。健は和男と四郎との顔を見比べていた。

「四郎! 俺はお前に意見をやる立場じゃない。だが、中学生以来の友達だから、云わしてもらおうぞ。」和男はポケットから組合の新聞を取り出した。

「これは、お前が書いた記事だな!」と言いながら、裏面の記事を指で抑えた。四郎はコックリと頷いた。四郎が頷いたのを確認すると、和男は記事を読みはじめた。

『我々は平和を愛する』これは当然だ。『武器も取りたくない』これも当然だ。『世界平和を実現する為には、全世界に社会主義体制を確立しなければならない。この体制が確立した時、永遠に崩壊しない世界平和が確立される。あのヨーロッパの戦乱の中に有って一切の戦争に対して、原因のいかんを問わず戦争はしないと、決議したのは 彼のインターナショナルではなかったか。そして最後まで平和の為に戦い抜いたのは、我がインターナショナルだった…。』これは、煽動記事だ。こう云う記事を読めば、誰しも『そうだったのか』と思うだろう。そして又、君の学識の豊かさに平伏するだろう。」

四郎は「いや！決して煽動記事じゃあない！これは、事実を書いただけだ！」と反論した。「うそつけ！事実なもんか、インチキじゃあないか！たしかにインターナショナルはそのように議決をしている。だが、実際に行った行動はちがうじゃないか！当時インターナショナルに加入していたのは、ドイツが圧倒的だったのは、お前も知っているだろう。（ドイツ社会民主党はフランスの8万人に対し、100万人の登録黨員をようしていた）そのドイツが、第一番に武器を取ったではないか！」

「そうかも知れないが、武器を取ったのはドイツ人でも、社会主義者じゃあないだろう？」四郎の声からは勢いが消え、明らかに確信は消え去った。

「四郎！お前、ドイツ社会民主党が戦時公債に賛成したのを知らないのか？」

「『祖国を見殺しにはしない』と、叫んで立ち上がったのはハーゼじゃないか！お前は『ハーゼは社会主義者じゃあない！』とでもいいたいのか？」

和男の大きな声が、事務所までとどいたのか 激しい口調に驚いた何人かの職員が顔を出してきたが、和男は構わず演説を続けた。

「フランスにしても、同じじゃないか。忽ち、武器を手にして、立ち上がっている。ただ1人だけ首尾一環して反戦を叫び続けたのはレーニンだけだ。インターナショナルの議長だったバンデンプエルデ できえ、祖国ベルギーのためにたたかっているじゃないか！お互いに社会主義者を殺し合いながら、お互いに『同士』と呼び合っただけじゃないか！」

「……………」四郎は 和男の顔を見る勇氣さえ失せたのか、黙って下を向いたままだ。

「一体 インターナショナルの何処を見て『最後まで平和を唱え続けた』と、いうのかね！」

「……………」

「俺は 外国のプロレタリアート達が、戦争をしたとか、約束を守らなかった事の善悪を咎めているのではないぞ！俺は餓鬼の頃からこの山で育った友達として、お前の生き方が、あまりにも、情けないから、言ってるんだよ。今までの事を出会う人達に 一々謝ることはないよ。

黙って『今日から、組合員のために働く』と、欲を捨てて 腹をくくって生まれ変わって見たら、どうだ！このままでは、折角のお前の才能が、生かされる事は一生ないぞ！」

「……………」

「四郎！お前、本当に この組合の会員が幸せになる手助けを考えているのか？お前の日頃の活動は喜ばれているのか？本当は 数々の怨みを買って居るんじゃないのか？」

お前が好き勝手な事をして、どうして 誰一人 お前に文句を言わない訳も、お前は充分承知してるよナ！

組合員は自分の家族や、生活を守るために、毎日懸命に働いているんだよ。お前に文句をつけている暇はないんだよ！だから、お前みたいな奴は、『勝手にすればいい！』と 思ってるんだよ。きっと！

俺はまた東京に戻るが、もう二度と この山には帰れないかもしれない。だから不満をかかえ

ていても、お前に悶着を付ける暇がない 組合員に代わって『ハッキリ』と云わせてくれ。

『四郎！ お前はこの鉱業所に住み着く ダニだ。 組合員の血を吸う 吸血鬼のダニだ！』

四郎は先刻から、たばこを吹かし、脚をピクピク揺すりながら、『何も聞こえません。』と云わんばかりに、窓の外を見ていたが、急にクルリと 和男の方に顔を向け、たばこの煙をイキナリ和男の顔に『フーッ』と吹き付けた。 様子を見ていた職員たちの間にザワメキが走った。

「四郎！ どうして マジメに俺の話しを聴こうとしないんだ！」

「帰ってくれ！ ココは職員の休憩所だ。 お前が来る所じゃあない！」と ヒステリックに叫んだ。

「健！、これでも お前は 四郎を尊敬するのか？ 俺は帰るぞ！」

和男は部屋を出ると、下駄を引っ掛けて外へ出た。 しばらくして、健も草履を引っ掛けて 憩休所を出て来た。

健は和男よりはるかに 大きい。(背も高いが、横巾も大きい。)

「健、お前 何センチあるんだ？」

「88くらい。」

「まだ、伸びてんのか？」

「ウン ……」 柔道着を着ている健は 一段と大きく見えた。

「いつから 柔道やってんだ？」

「いんにゃあ(否)、チョット遊んどるだけ。 兄ちゃんチット やって帰ろうか！」

「ウン！」 和男はその気になって すぐに返事のかえした。

「アッ、ダメだ！ まあだ腫れとるけん！」(そうだった。顎は有ったが、歯は無かった。)

今まで忘れていた和男の下アゴに 急に痛みが走った。

健の童顔が笑った。可愛い顔だ。 和男はこの時、出来ることなら、弟の健を 東京に呼び、広い世間を学ばせてやりたいと思いながら 家に向った。

☆ 巣立ち前 ☆一匹の魚

健は家に帰ると、今日の出来事がよほど嬉しかったのか 母に、つぶさに報告をしていた。 母は夕食の支度をしながら聞いていたが、健の成長を感じて、喜んでる様子だった。

和男もこの報告の様を見て、昨夜から今日までの わずか数時間の間に、健が一気に成長した(オトナになった)ように感じていた。

和男は一家の近い将来の事を考えていた。 姉は 予定通り、移民を果たすだろう。この山の閉山が 頑張って あと2年遅れてくれれば、健も自分も学校は何とか卒業できる。

移民をしない事を考えると、健は卒業はできても、『採鉱冶金科卒』では就職は困難だろう。(卒業生58名にたいして企業からの求人は僅か10名) 学校が成績順に推薦すれば、健に望

みは期待出来そうもナイ。(体格は○だが、せいせきは?)だから……。

だが、健には、恵まれた『体』がある。どんな労働にも堪える体力がある。力仕事なら何でも出来る。要するに、贅沢をいわずに、飢えて死ぬことはない。その気になれば、昼間働いて、夜『学ぶ』つもりなら、『夜学』に通うことだって、できる。

「健 チョット！」和男は越窓に腰を下ろしながら、健を呼んだ。健は鴨居をくぐり抜けるようにして部屋から出て来た。

「ここに座れ。お前学校に行く気はないか？」

「えっ？ 冶金科を卒業してから、また学校に行くのか？」

「そうだよ！ 東京の学校だよ。」

「……？ なにしに？」

「お前は 学校を卒業したら、直ぐにでも働いて、家計を助けようと思ってるだろう。しかし、考えても見ろ、夜学に通学すれば お前だって大学にだって行ける。何も偉い人間になる必要はないが、立派な人間には 成らなければならん。そのためには『力』がなくてはならん。青年時代は その『力』をつける時代だよ。『時を逃して』あとで、いくら悔いてもダメだ。

今、家には金がない。お前の入学金は無いだろう。だったら、お前が自分で働いて作れ！ どうせ、今年の試験には間に合わない。来年の試験を目指して 東京に出て、一年間頑張ってみたらどうだ？ なり振り構わず働いて、勉強をするなら、知合いが誰もいない方がいいぞ。

若い時に本当の力を付けておかないと、『口先だけの男』で、一生を終える事になる。」

健の顔付きは、和男の説得の途中で、明らかに変わった。なにかを感じた様子が見えた。「体力も知力も若い時にしか身に付かないものだ。寝倉(ねぐら)と食費位は俺が何とかする。本気で考えて見てくれ！」

健はコックリと頷いた。

夕方母は又お産の連絡があつて、出かけた。健は昨夜 眠っていないらしく、「眠い！」と言って早々に床に就いた。

姉は食事の後方付けを終えると、居間で 幼稚園で使う指人形を作り始めた。見れば、箱の中には 2~3個の人形の頭が出来ていた。

「何それ？」と尋ねると「アカズキンちゃんよ」と返事が返ってきた。姉は水にひたした新聞紙を糊で固めると、指を器用にうごかして 人形の目鼻を作った。

「あんた 恋愛したことある？」

姉はとつぜん訊いてきた。姉と こんな話しをするのは 初めてだった。

「いや！ なか(無い)！ 片おもいなら、ある バッテン。」と、なんだか恥ずかしそうに答えた。

「そいどん、やろうと思えば いつでん(いつでも)出来ると 思うチョル。結婚につながる様なもんは とってもできん」姉は笑った。

「健には なんてん相談に乗ってやれる。じゃつどん姉ちゃんにはダメだなあ。女の人の気持は サッパリ分からんけん。そいどん、姉チャンの立場は 姉チャンの自由じゃろう！ どうせ嫁に行けば、よそさん(他人様の所へ)行ってしまおうとジャけん。」

和男は移民の事を話した積もりだった。

「でも、女って変な者よ。今村さんに結婚を申し込まれた時、あたい(私)はもうあの人より他の人は愛せないと思ったわ。今でも、はっきりと！そして、ブラジルでも、何処へでも付いて行こうと思ったのよ。それなのに、あんたが帰って来て、こうして久々に家族が顔を合わせて暮らしてみると、何か『大きな』って云うか『大切な物』を、忘れていたような気がするのよ。

『これではいけない！』と、自分に言い聞かせても、どうしても その『ぼんやりとしたもの』が、直ぐにまた 頭の中に浮かんで来て、追い出せんとよ。

言葉も通じないところで、突然 独りぼっちになってさ(母さんと同じ様に)！」

「……………」(和男は『何も今村氏と結婚することは無いじゃないか！』と、一瞬 反応)

「移民への具体的な手続きが始まったら、この『モヤモヤ』も自然に消えると思っていたけど、ヤッパリ だめネ。自分の心で 本気で『決心』をしないとね。もっとシッカリしないとダメなのよネ。」姉は計画はすでに決めているものの 揺れる自分に しみじみと 言い聞かせている様子だった。

姉はもう24才。婚期の早い田舎では、遅い方だ。自分でもそれを 意識しているのだろう。姉が『可哀相だ』とか、『母が寂しがらるだろう』とかを抜きにしても姉のことは、『どうしたら良いのか？』 和男には皆目見当がつかなかった。

『そんなに愛する人なら 一緒に行くベシ！』と云われれば、『一緒に行くベシ！』だし、『今村氏だけが、男じゃあない だろう！』と云われれば『なるほど！』と云うことになる。

「おふくろは 何と？」

「それなのよ！ 母さんが何とか言ってくれば、あたい(私)もハッキリ出来るんだけどさ。

『アンタが 自分で決めるのよ！』ってしか、言ってくれないのよ。 ああ云う気性の人だから、何も言えないのネ。」

それはそうだろう。母にしたって大黒柱を失って、黙って耐えて来た一家の娘に『さようならブラジルで頑張っ！ネ』とは トテモ言えないだろうし、だからと言って、今村氏との結婚を『諦めなさいよ！』とは、なおさら云えないだろう。

しかし、和男は 二人の性格をかんがえると、この問題の結末は もう見えている様な気がしていた。

姉はいずれ、実家をはなれて 何処かへ嫁いで行く身であることは 百も承知をしているが、自分の意志だけで、ブラジルへの『移民』の決心を付けられる様な女ではない。

一見、表面に見える姉の性格は、母とは全く違う様に見える。だけれど、中身(自分が、独りになって 深く考えるとき)は、いつも 母と全く同じ結論に辿り着く女の二人だからだ。

時計が十時を打った。母はまだ帰って来ない。

「俺は、健を大学に行かせてやりたいと、思っている。彼奴(アイツ)は周りの人から、『大学等に行くガラじゃあない。』と思われているし、本人も そう思っているようだけどね。だけど、俺は今日、そう決めつけちゃあ いけないかも？ と、思いはじめたよ。」

「健はダメよ。」

「どうして？」

「『どうして？』って、ケンには そんな意地はないわ！」

「たしかに 今は、そんな『意地』なんてものはないよ。だけど、健は何かを持っている様な気がするんだよネ。ヘッピリ腰の男ならともかく、あの体格だよ、少々の苦難に『音を上げる』ような、体格じゃあないよ。大物の『政治家』に成るかも知れないし。」

「…… …？」

「俺は 健に体の内に秘めている 何かを感じるんだよネ。

これは毛沢東の話だから、大物すぎて、話しにはならないかも知れないけれど、彼は学生時代に社会の改革を痛感するや 改革運動に参加、『口先の理屈や、付け焼きの知識が通用しない事』を知ると、学窓にもどって、超人的な勢いで膨大な資料・学説を読破して自分を創り直したと、聞いたことがあるよ。

俺には、そんな大それた事は出来ない。でも健なら、あの体格なら その気にさえ なれば、きっと出来ると思うんだよネ。それに、教養は『心のおしゃれだ！』と、云う人も居るし、邪魔には ならないよ。」と、和男は笑った。

(和男は、根拠のナイ風評に惑わされない見識を備えることは、男の基本だと思っていた。)

「それに健は今、健なりに幸せだから、俺達の貧乏も『貧乏だ』とは思ってはいないと思うよ。健が自分の貧乏を本当に感じたら、彼奴(キヤツ)は立ち上がるかも知れない。

俺は、東京に行って自分の貧乏を知った。俺達の生活を思うと胸がイッパイに成る時がある。

同じこの炭鉱で働き、炭住で暮らす家族の中で、たいして大きくもない一匹の魚を四人で食っている家族が、どこに居る？

健にしたって、腹がへるだろう。時には『ウマイ物を食いたい』と思うだろう。だが、我が家は其れが出来ないんだよ。二人で 1匹だって食えないじゃあないか。

あと1年頑張っって、健が働きだせば、少し生活は楽になるだろう、でもこの貧乏は治らないよ。少くも生活が楽になっても、そのために、健が一生芽を出せない人生を歩むことになったら、それこそ、『極貧の極み』だよ。 アリ地獄に落ち込んで、懸命にもがく『蟻』と同じだよ。

ここは『貧乏の仕ついでだ！』と、腹を括って一匹の魚を四人で食っても良いじゃあないか！

俺は健に、本当の勉強をさせてあげたいよ。」

「……………」 姉は(かなり驚いたのだろうか) 黙って和男の顔をしげしげと見ていた。

和男は東京を出る時、一家揃ってブラジルに移住する事も考えていた。だが多久の山に帰って、この山で懸命に『生きている(生活をしている)』 自分の家族の姿をみて、腹が立た。

『これだけの貧困に耐えている家族』を 誰かの都合で(のらの犬猫のように)、日本を追い

出されている様に思えてきて、黙って見過ごす事ができなくなっていた。

突然奥の障子が開き、健が顔を出した。「東京に行く事ば考えよったら、眠れんかった。」
健は飯台の前にドカンと胡座(あぐら)をかいて、たて続けにお茶を飲んだ。

(我が家には お茶しか無かった！)

和男はフット、まだ働いている母の事を思い出して『赤チャンは生まれただろうか？』と、思うと、『母も昼夜を問わず 人の命を預かって懸命に働いているのに』と、あらためて訳の解らない不満が込み上げて来た。

11時になって 母は帰宅した。

「寒い、寒い！外は冷えてきたよ。今夜はモット冷えるかも知れない」と言いながら、服も脱がないで、火鉢に手をかざした。姉に熱いお茶を入れてもらい、少し身体が温まると、部屋衣に着替えながら、「また 男の子だったよ。今月は全部男の子だからね。不思議だね」と、たわいもない報告をしていたが、母たちは 和男が床に就いてからも、遅くまで姉と話しをしている様子だった。

☆ 変わらぬ四郎軍団 (通例の力)と(悪者の勝利！)

裏山では希望退職の届出と、移民の手続を開始した。

会社の労務課での希望退職の手続は難なく受理されたらしかったが、その脚でアザミが丘の組合に移民の手続に行くと、四郎の仲間に散々『いじめられた』と悔しがっていた。

嫌みを言われ、子供のような意地悪をされて『悔しい！』と、叔母は母(自分の姉)に愚痴をこぼしに来た。叔母は日頃から気丈な人だから、愚痴をこぼすのは よほどの事に違いなかった。

叔母は自分が 心付けをしなかったから、目の前に置かれている書類を貰うのに、1時間も待たされると、悔しがっていた。 (悪法も又法なり！)

今回の『集団移民』の様な大掛かりな案件の場合は その案件を効率よくまとめるために、会社の役員を 委員会のヘッドに据えた専門の『実行委員会』を立ち上げて処理をしていた。申請・手続等の窓口は労働組合の窓口だが、判断や許可・承認は全て『委員会』の判断を経て行われていた。

※-1 通例とは(心付け)のこと。

組合に頼み事をする時は、窓口に(酒を1本)を届ける事を(通例)と言う。

※-2 この(心付け)は、何時の間にか →(通例)に成り、→やがて掟(おきて)に成った。

何時の間にか(掟)に成長した(通例)に従わないと、→掟破り(おきてやぶり)になる。

※-3 当然のことながら、掟破りには、罰則が付く。

目の前の書類を1時間待たした後に、手渡すのは、『意地悪』でもナンでもなく、『当然の処罰！』と云う事になるのだ。（悪者の勝利！）

『一体誰のおかげで移民が出来ると思っているのか？ そりゃあ、我々は最初っから、組合員のためには、どんな努力も惜しみませんよ。だから どうしろとは言いませんよ。でも、気持ちだけの物は有っても良かったでしょう。』と、云われたと言って悔しがった。

生まれ育った日本を離れて、ブラジルに移民をすると、決断はしたものの、ナーバスになっている叔母に取っては、無神経な職員の言葉は 余程辛かったのだろうと同情をした。

『酒一升を節約する奴は 馬鹿ダ！ どんな書類を作るのも、俺達の胸三寸だからな。…。』これは、心付けの酒に酔って口走った、(恐ろしい限りの)四郎の言葉だ！

酒に酔った奴が吐いた言葉だとは言え、公然と豪語するのだから、奴らの神経は恐ろしい。

多久の山からブラジルへの移民は始めての事だったが、他の鉱山からの移民では、委員の感情を害すると、移民先の待遇にも影響が出ると、ささやかれている程だった。

彼等はほとんど仕事はしない。朝の組合の事務所は掃除婦のオバサンと事務員が一人。昼すこし前に役付きの職員が出勤！（タイムカードなし＝早朝外回り、との事＝ご苦労様！）

運ばれてきたお茶を飲み干すと、会議室へ（新聞、ポスター等、の編集・確認・承認…？）午前中の仕事は？（二日酔いの 酔い覚ましの様なものだ。）

そして夕方、太陽がボタ山に傾くころ、
多久市のネオンを求めて、活動開始！（夜のスポンサー探しのTEL）
（彼等には自分で遊興の料金を払う積もりはナイし、午後からの仕事もナイのだ。）

四郎達のこうした勤務態度(実情)を苦々しく思っている職員はいても、口に出して『非』を唱える者はいない。（言えば最後！）言いたくても言えないのだ。そして1年、そして3年、何時の間にか、何とも思わなくなって いくのだ。 反省して曰く、『清水に魚は住まず！』と。

☆ 四郎の復讐(その2)

夕方、裏山の叔父が ひょっこり尋ねて来た。酒に強いはずの叔父が ひどく酔っていた。和男は叔父を見て 何か大変なことがあったなど、直感した。

「ワシ等は もうシマイ(終り)じゃ！」豪放磊落(ごうほうらいらく)な叔父が、肩を落として、今にも 泣き出しそうな顔をしている。

「どうしたんですか？」

「…………。 ……………。」下を向いたまま、返事はない。

「まあ まあ、叔父さん 役には立てないかも知れませんが、話してみてくださいよ。」

「そうじゃあナ！ 黙って泣いていても 分からんモンな！ ワシが馬鹿じゃったんよ。ホンマ」叔父はボツリ ボツリと話しはじめた。

「元はと言えば、ワシが馬鹿じゃたんよ。ア～ア！。今からでん 戻って奴を ぶっ殺してしまてえよ！ ワシに 家族がいなければヨウ！」

（アバレ出す叔父にブレーキを掛けているのは 可愛い家族だけ？）

上がり框(かまち)に腰を降ろした叔父の 拳(こぶし)の震えが止まらない。

「ドウも コウも、呆れて口がきけん！ 和(カズ)さん、この山はもう メチャクチャばい！ワシももうコゲンところにや 住みとうなかよ！」

叔父は時々目を閉じた。目を閉じると 叔父の頭は『コックリ』と揺れた。よほど飲んでいるもようだ。叔父は肝っ魂が大きい男だ。少々の事は笑い飛ばして許してしまう男だ。だから、和男は今まで、本気で怒った叔父の姿は見た事はなかった。

「和(カズ)君、ワシ等のブラジル行きは、取りやめじや！ 出来んように なって仕舞うた！」
「どうして？」

「どうして？ツテカ！ どうも こうも、『移民』は定員に達したけん、もう べ切りじやと。」

「えっ！ まあだアザミガ丘の組合事務所には まだ募集のポスターが貼ってあったけど？」

「いんにゃ(否)！ ありゃあ剥がし忘れジャと！ ンなら、そりゃあ仕方なかとよ。じゃっどん、」

「『じゃっどん』 って？」

「じゃけん、ワシは会社の労務課に急いで戻ったとよ。退職願の書類ば出して来たバツカリ じゃったけんね。そしたら…」

「『そしたら…。』 何？」

「そしたら、『退職の手続はもう完了してるけん、退職金ば来月末に受け取りに来い』って言われてしもうたとよ。『閉山を見込んでの対策じゃけん、変更は一切出けん』だと。ワシが馬鹿 じゃった。ってコツたい！ 退職の手続ば先に済ませた ワシが 馬鹿ナンよ！」

「…………。そげな！」

「じゃっけん(だから) ワシヤア、来月から失業者たい！ 炭住も 出にゃあナランし！ エライ こつ してしもうた！」と、叔父は元気なく うなだれている。

和男は 一瞬『四郎に手続の撤回を頼んで見ようか。』と思った。そして段取りを考えているうちに何だか 一連の成り行きが あまりにも良く仕組まれて居る様に思えてきた。と、フツと

この話はあまりにも『出来過ぎている。』と思った。

会社の労務課に出した退職願いが、30分後には受理され、決済が 完了しているとは？。

あまりにも手速く(特別のスピードで) 事務処理が出来ている事に気がついた。

和男は『これは不自然だ。誰かの意向で、準備が出来ていたのか？』と、思った。

この『不自然だ』と言う疑問は 和男の頭の中で次第に増幅し、ふと『畏かも？』と言う仰天の疑問にたどり着いた。

『畏かも？』と思った瞬間に この疑問はたちまち『畏だ！』と言う、確信に変わり、確信は『誰が？・なぜ？』となり、『四郎の・俺への腹いせかも？』と云う疑念がはしった。考えてみれば、この様なことを考えだすのも、実行出来る者も 四郎しかいない。

和男は…これは『四郎が造った畏』だ！、と確信した。

叔父は突然 炭住を出ることになったら、行く先のあては無い。移民は(メ切りで)もう出来ないし、炭鉱を辞めたら次の『職』のあても 無いのだ。お人良しの叔父は『すべて、自分の身から出た錆』と、観念するにつけても、八方塞がりになってしまった成り行きに、『自分が家族を路頭に迷わせてしまった』と、叔父の頭の中は 自虐の念で イッパイになっている様子だった。

「しかし、ひどい話しですよ。『言語道断』って話しですよ。『退職者はもう、組合員じゃナイから一切面倒はみません。』 何って言うのは、『屁理屈』って言うもんですよ。屁理屈は世の中では通りませんよ。屁理屈を通す奴は、自分は『決まりや掟(おきて)』には抵触しているような事は言っていない！」と、得意そうな顔で豪語して見ても、大方の場合、『決まりや掟』の本意からは 大きく外れてるんですよ。それにしても、憎クタラシイ！

アッパーカットを顎じゃあなくて、鼻ツツラに思いっきり突き上げて、鼻の穴が天井を向いてしまう程 カマシテやりたいですよ。」と和男は拳をかまえた。

「まあ まあ、まあ。そんなに怒りなさんな！」

お人よしの叔父は、和男の震えている拳をみて、直ぐに なだめにはいった。

「まあ、まあ。いまさら、もう どうにもならん事じゃけん！ワシの愚痴ジャと 思うて聞いてくれれば、モウ そいでよか。(それで良い。)」

「ごめんください！」 玄関に誰か来た。

誰だ…？ 誰の声だ…？ 四郎の声だ！ 四郎だ！ 四郎が来た。！

☆ 四郎の復讐(その3)

和男は拳を握りしめて立ち上がった。

四郎は玄関の履き物をみて、誰か先客が居ることを 察知したようだったが、その先客が叔父だと分かったと、一瞬だったが、四郎の顔に『シマッタ！』『マズい！』と言う表情が走った！

だが、流石に(さすがに)百戦錬磨の性悪！、サッと、にこにこ顔に表情を変えた。

「これは これは、古川さんもお見えでしたか！」と、何食わぬ顔でピョコリと頭を下げると、「奥さんに伝言があったもので お伝えに来ましたが、又出直しますから、……。 」と言いきると、何回も頭を下げ、踵(きびす)を返して急いで帰ろうとした。

和男は四郎の姿を見た時、『本気で鼻の頭にアッパーカットを叩き込む』つもりで居たのだから、四郎は和男の形相を見て、一刻も早くこの場を去りたいと思っているに 違いなかった。

「四郎！ 話が有る。ちっと上がれ！」

「カズさんそんなに怖い顔を、しないでくれよ。俺も話が有って来たんじゃないけん。」

四郎は和男の剣幕に怯えたのか、飯台の傍に正座をすると 頭を畳みに擦り付けんばかりにさげると、ハッキリした声で、「古川さん、今度の事は全部 我々の責任です。必ず何とかしますから、少し時間ば(を)下さい。」と、四郎は叔父に懇願した。

こうまで へりくだって頭を下げ謝られると、忽ち全部を 許してしまうのが叔父の性分だ。

「まあ、まあ 四郎さん 頭を上げてくれ！。これじゃあ出来る話もでけんごつ なっちゅうもんじゃ(出来ない様になってしまう、と 言うものだ)よ。」……と。

四郎は自分の姑息な考えで、組合員を翻弄している事を 和男に咎められ、中学時代からの同級生としての忠告にも、反省はおろか 職権の優位な立場を使って『和男の叔父一家』を破綻に追い込むことで、和男への怨みを晴らそうと企む(たくらむ)奴だ。

まともな人生を捨て、『裏街道』を通して生きるつもりなら、『オモテ街道』を生きるよりも はるかに辛くて厳しい『裏の掟(ウラのオキテ)』に従わなければならない。

たとえば、『理由を問わず 堅気の人(オモテ街道の人)には、一切の手出しは許されない。(迷惑行為は一切ダメ！)』等と言うオキテが在る。

これが『裏街道』の正義を貫く掟(おきて)、即ち彼等が口にする『仁義』なのだ。

叔父は満州の開拓団に居た若いころ ヒョんな事で満蒙(満州と蒙古)が領土の主権を争う(ノモハン事件)の軍属(日本軍)配下の『馬賊』に身を置いた事があったと聞いている。

だが、『馬賊』に身を置いてみると、馬賊には『日本軍』『蒙古軍』も無かったと云う。殊に隣国ロシアが混乱に乗じて、この争いに介入して自国の領土拡大の動きを見せ、蒙古軍と結託して、『日本軍』を攻め始めると、叔父の馬賊は『日本軍(満州軍)』の攻撃を開始した。

この時叔父は出陣を拒否、自分の指を切り落とし、『仁義』を通して『馬賊』を去った男だ。

叔父は、四郎から、どんな仕打ちをされても、四郎をオモテ街道の人と、認めているうちは、一切の手出しは しないだろう。(遠の昔に裏街道を抜けた。とは云え)死ぬまで 裏の仁義も貫き通す男なのだ。

四郎は叔父の『「まあ、まあ 四郎さん 頭を上げてくれ！」』との言葉に便乗し、頭を上げると 手提げ袋から 封書を出して、『お帰りになったら、先生(和男の母)にお渡し下さい』と言いきり残して、何度も頭を下げながら、粗々くさと、帰っていった。

母が帰宅して封書をしたためると、『勤務契約更新』という事で、労務課に出向く様にとの連絡事項だった。

母は『何で？』『今頃？』『労務課に？』と、しばらく訝っていたが、『良い話じゃあなさそうだし、ヤッパリ 気になるから！』と言って帰宅したばかりだったが、労務課に出かけて行った。

労務課の話は『予感的中！』 病院の看護婦は解雇。助産婦は嘱託助産婦。

☆＜嘱託助産婦とは＞

助産婦手当は入院出産のみ。

炭住出産＝（出産料・産前産後の往診料は個人支払い。フリー契約）

これでは、助産婦はとても、助産婦だけでは 家族を養えない厳しいものだった。

母は＜嘱託助産婦＞に成る事を承諾して帰ってきた。

憂鬱な夕食だった。いつも冗談を飛ばして騒ぐ健も、黙ったまま、一言も喋らなかった。

和男は風呂から帰って来ると、すぐに床に入った。

うとうと としたと思った。話し声がして目を覚ました。十時だった。となりの部屋から叔母の話し声が聞こえて来た。

「時が経てばおさまると思うけど、一本気なのよ。ほんとに 困ってしまう。わたしは もうこれでいいと思っているのに、うちの人は それでは気が済まないのね。」

「でも、行けるようになって 良かったじゃない」

「ほんとに良かったわ。でも現金なもんね！組合の人達は」

四郎は和男の家を出ると、叔父がいないことを 見越して、裏山に行ったらしかった。

和男は襖を開けて隣の部屋に入って行った。

「叔母さん、今日四郎が来た(行った)でしょう！」和男は胡座をかきながら、話しかけた。

「そうなのよ。朝、組合長から あんなことを云われた後だったでしょう。又なにか有ったのか？って思って ビックリしていたら、『今なら何とか手を打てるかも知れない。今夜 会社の係りの者に一杯飲ませて話をして見るから』って云うでしょう。早速一升下げて行ったのよ。すると、

『二千元も有れば』って云うから、『五千元』持って行って、『宜しくお願いします！』って言って来たのよ。そしたら モウ全く掌を返すようよ！ けど、ウチの人は それが気に入らないのね。『五千元 取り返して来い！』って、こうなのよ」

「……………」

「それで良かったのよ。サッキ林さんが来て、『話がついた。安心してください！』って言って帰ったわよ。私、今失業されたら、どうなるか と 思ったわ。本当に！」

「叔父さん 怒ったでしょう。」

「そうなのよ。」カンカンに怒ってるワ！全く一本気なんだから。あの人は何時も『それで』損をしているのよ！『あんな奴らには 首の骨が折れても 頭は下げない！』って！」

「怒るのが当たり前だよ 叔母さん。そんな不正を堂々と催促に来るんだからさ。奴らは『不正』だなんて、全く思っちゃあ いないんだよネ 多分。」

「本当にネ。わたしも どうして『あんな人を委員にしたんだ ろう？』って思うわ。」

「私も今日は労務課で さんざん厳しい事を言われて来たわよ。でも、会社の現状を説明されると、受け入れるしかないし、組合の人達に言われるより 良かったですわ。」と、母は笑った。

「それで、姉さんは どうしたと？」と、叔母。

「仕方ないよ。今失業してしまったら、本当に どうしようもないからね。」

「それで、給料は？」

「給料は来月までで『オシマイ』だって。これからは 苦しくなるよ。近頃はお産をする人も少のう なってしもうとるし、来月は六人くらい生まれるけど、今月は四人よ。どうかすると、たった二人って月もあるのよ。今までは給料を別に もらってたから、何人生まれようが、なんとも思ってたのに、ね。これからは、もし、二人しか生まれん月が続いたら、炭鉱からもらう『委託料』だけじゃあ 生活はでけんよ。でも、何とか切り詰めて行くしかなかよね。」

この『何とか切り詰めて行くしかない』と言うのは、ギリギリの出費を さらに『切り詰める』と言うことだ。これは『毎月、毎月をヤット食いつないで生きていく』・『まだ、死んではない。』・『まだ、生きている』・『まだ、ウゴメイている。』という世界だ。和男はこの時ほど、母を哀れに思ったことはない。

永い間、女手一つで生きて来ると、どんな事を強いられても 直ぐに受け入れなければ生きられなかったのだろうと 思った。

「あんた達が ブラジルに行くと言うのに、本当にごめんネ。安心もさせられなくて」と母は涙していた。

叔母も母の手を握りしめて、小さな声で『頑張ってるね、姉さん！』と云っている様だった。

母も妹の叔母も、毎日、毎日 これほど頑張っているのに、何年経っても少しも変わらない生活の中で、家族の『小さな夢』を描き、『ささやかな希望』を探して 只々毎日を必死で生きているのだ。

馬賊の仁義

間を1日置いた夕方『酒を飲みに行こう！』と、叔父が憤然とした様子でやって来た。和男が突然の誘いに戸惑っていると、叔父は『送別会(移民の)と思って付き合ってくれ！』と云った。和男が、ジャンバーを引っ掛けて叔父の後にしたがうと、叔父はトンネルを抜けて、多久駅前のお楽しみ街に向った。

「東京へは いつ帰ると？」と、叔父。

「明日帰ろうかと、思っています……。 学校も始まるし。」

叔父はコックリと 頷いた。二人は暫く無言で歩いていたが、暫く歩いていると、腹を立てている次第をボツリ、ボツリと話しはじめた。

「カカア(女房)が組合に酒と心付けば持っていったぎんと(持っていったら)『労務課に行ってみんさい(行ってみなさい)』ち、言われたげな。」

「……………。」

「カカアが労務課に行ってみたら、くさい、移民はま〜だ、『受付中』じゃった げな！」

「えっ？ じゃあ こないだの話は？」

「にゃあごってん なかと！（何と言うほどの事はない！）あきれて、口も塞がらんタイ！」

「そんな デタラメな。全くの造り話とは！ いくら彼奴等が タヌキ野郎でん、酷すぎる。『話を着けるから、金が要る』と云うなら まだしも、最初からの造り話(策略)だったとは！まるで、『ドロボウ』じゃないですか。」

「それが、組合長と、四郎ドンとの計画じゃったんじゃよ。わしは昨晚、あの二人がヨッパラッて帰るのを見たんじゃよ。」

「……………」

「腹は立つが、ワシ等は永い間働いて来た 日本ば去ろうと、腹を決めたんじゃ、年甲斐も無う 喧嘩はしとうない……………」

和男達は駅前 of 歓楽街を通り過ぎて街外れにある、叔父の行きつけらしい 酒屋に入った。「おかみさん。たのむバイ！」叔父は 店の奥に声を投げると、トントンと階段を上っていった。

和男は叔父に続いた。ススで黄色くなった障子を開けて、部屋に入った。窓を開けると直ぐそこ(手を伸ばせば届く ほどの所)には山肌の岩がせり出し、切り裂けた岩肌からは、ポタポタと清水がシミ出していた。

和男は思わず感動した。『佳』と言う文字を自分が 独り占めにした気分になった。

「いい所じゃあないですか！」

「ここは、雨上がりが良か。岩肌が一際(ひときわ)美しく輝くんジャよ。」

「何に しなさる？」シワのふかいおかみさんが 顔を出した。

「どぶろくに してくれ、つまみは大根漬けでよか。わしらは 貧乏じゃけん！」

「さようなこつは ありません！」おかみさんは、人の良さそうに 言い残して降りて行った。

和男達は塩辛い大根漬けを噛みしめながら、酒を飲んだ。和男は何年振りかの酒だった。叔父は時々額に深い皺を作って酒を五臓六腑の隅々に流し込み、身体中の神経を集めて味わっている様子だった。

今回の事件が無かったら、叔父にとって質素だが、どんなにか満悦の『送別の酒宴』だっただろうにと思った。

「わしと、奴らとは『到底両立はしない』と思っているのじゃが、こうなって見ると、『今まで、わし等が黙っていた』のがいけなかった ごとある。わしは、今に成って後悔しちよる。この前の委員選挙の時は田中(今の組合長)に投票してしもうた。奴等が二枚舌を使う連中じゃと云う事ぐらいは知っちゃった。会社に行けば『会社によか事』、組合に帰って来れば、『組合によか事』言いよる。『学』のある連中じゃけん、ワシ等は『頼りになる！』っち 思うチョツタ。」

この時和男は、フツと、「……………」母の解雇も？」という 疑念が走った。

「奴等が、こげな悪事ば 平気でしとるんじゃあ『俺が立候補ば、すりゃあ良かった』っち思う時のあつとばい。ほんなごてえ 情けんなか…！ ろくな奴は 立候補ばしとらん。

みんな、一癖も二癖もある『ヤクザもん』 ばっかりたい！ 1年中働かんで、『労働者革命』と

か、素晴らしそうな事ばかり云いおって、裏をかえせば みんな ナマケモンの『虚無主義者ジャ!』と云われても しかたんなか連中ばかりジャよ! 毎日デタラメな生活をしとって、そんな時さえ良ければ、あとは何とも思わない奴等ジャよ!」

叔父は茶碗にどぶろくを注ぎながら、独り言の様に呟いた。

「自分が投票した人間に、後から こげなコツは言いたくないがのう!」と言って 口を噤んだ。

(叔父はこんな事を言って酒を呑んでいる自分が、情けなく成ったのかも知れない)

言い終わって、叔父は茶碗に なみなみと注いだドブロクを一気に煽った(あおった)。

☆ 幹部の酒盛り

「和(カズ)君! ワシは あんたに頼みがある。こんな事を頼めるガラじゃあ ないが、聞いてくれ。ワシは今度ばかりは 本気で腹がたったが、あまりの仕打ちに もう、腹を立てる気も のうナッチ(無くなって)しもうた。悔しか事バツカリじゃが、ワシはもう、逆ろうとうない。『逆らう』チと、なれば ワシは奴等を全部 処分せにやあならん。こりゃあ大事(おおごと)たい。

わしらは年が明けたら、ジキに(すぐに) 日本を発たにやあならん。ドウにもならんのじゃ。

叔父は今まで、自分自身に言い聞かせている様な 口調を破って、大声を出して笑った。

隣の部屋は先刻から客が入って、騒ぎ始めた。どうやら何処かの宴会の流れの、二次会の様子だ。

「やあやあ! 早くここに来て座れ!」と無礼講だ。

「コッチに來い!」・「そげん遠くに座っていると、出世は叶わんゾ!」・「早う早う!」と、乱暴な言葉が飛び交っている。また、新しい客が何人か加わった様子だ。

「若い者は良い(イイ)のう!」

叔父は時々哲学者の様な 飄然とした事(あとでナルホド!と合点)を云う。

和男は叔父の節くれだった手や、喉元を見ると、自分達の『若さ』の輝きを改めて感じていた。

暫く(小一時間ほど)対面して飲んでいると、もう話すことは何も無いような気がして、二人の話は途切れがちに成り、何となく 襖で仕切られた 隣の部屋の様子を伺う様になっていた。

と、以外にも隣の客は『四郎達?』と思った。和男は酔いが一遍に覚めた様な来がした。

確かに、組合長の田中の声も 四郎らしい声も 組合幹部の林らしい声も聞こえて来る。

人数は十人足らず?。

叔父も和男と同時に 同じ事を感じたらしく、カッと目を開き耳を立てている様子だ。

語尾に奇妙なアクセントを付ける声は四郎に間違いない!

「ふく屋の女はブス(粗女)じゃった。うっさごと(ウソ)と思わないばあ(おもうなら)買うてみたらよか」 さかんに、女の話をしている。

誰かが女の名前を上げると、皆でその女をこき下ろす。そして、ドット笑うのだ。

これは(まるで 幼稚な 悪ガキの世界だ。) 和男は次第に不愉快になった。叔父もいやな顔付きになっていた。

☆ 自分の噂

やがて話題は病院の看護婦に移り、落盤事故で夫を亡くした 未亡人に移っていった。そして遂に和男の母の名前が出た。

「あの産婆か。ありゃあイカン！ 全くダメな女ばい。」(余計なお世話だ！)

「産婆は色気んナカ！」

「そいに、子供が ふとすぎる(おおきすぎる)」

「こぶちゅうたら思い出したが、四郎さんなあ そのこぶに、ひどう やられよったなア…。『お前は 鉱業所に住着く ダニじゃ！ ちゅうてナイ！』 組合長の田中が、和男の声色をまねて 大声で怒鳴って見せた。」 皆がまたドット笑った。

「そいどん(それでも)今頃は 炭鉱の看護婦ば辞めさせられて、蒼(あお)うなっとうろ！」「つけあがった奴等は、少し脅かして 覚えつかせんば(わからせないと)いかん。」「産婆ば辞めさせたとは、四郎さん 日本中でアンタが 初めてジャロウ！」と田中(組合長)「こんだあ(今度は)ジャパニーズ『ギネス』ば 作ってくさい、『登録1号サンバ』ちゅうのはどうじゃろか？」 等と、面白くも何ともない事に ドット笑い興じ、馬鹿騒ぎの拍手が沸いている。

叔父がドブロクの瓶を掴んで立ち上がった。立ち上がった叔父は、真っ赤に燃える赤鬼の形相で、間仕切の襖を『ドン！』と蹴破って隣部屋へ踏み込んだ。

「ウヌ等 生きて帰れると思うなヨ！」と 雷が落ちた。物凄い怒鳴り声だ。同時に叔父は組合長の田中に向かってドブロクの瓶を 投げつけた。瓶は座卓に当って弾け、ドブロクは座敷中に飛び散り、瓶は床柱に当って割れ、瓶のカケラは田中の頭にも命中、田中のコメカミからは。血が吹いた。宴会場は一瞬にして修羅場と化し、五、六人の男達は悲鳴をあげて、階段を転げ落ちるようにして、素足で逃げ去った。

叔父はズカズカと組合長に近づいて行った。組合長は慌てて、立ち上がり両手を上げて、『話せば分かる』と叫んだ。

『ウヌ等 話をして 分かる玉カ！』と言うが早いか、襟首を掴んで投げ飛ばした。

叔父は師範級の有段者だ。背負い投げの途中で手を放したから 堪らない。宙に舞った組合長は床柱に腰を打ち付けられて 動けなくなってしまった。

再び叔父が 動けなくなつ組合長に近づくと、『分かった。もう分かったから、警察を頼む』と、ガタガタと震えながら懇願した。叔父は『警察を呼びたいのか？ 呼ぶのはタヤスイが、ウヌ等の悪事はそのまま全部 世間様

にも本社にもバレてしまうが、いいんだな！ 後で、「四の五の」言うなよ！』と念を推した。

「ワッ！」ヤット事の次第に気が付いたのか、「うう ワッ！々？ ヤッパリ ダ…ダ！」と、言葉にならない声を出し、途中で意識が飛んだのだろう そのままガクンと首を落として 目を閉じてしまった。

一方、和男は何を思ったのか急いで階段を駆けお降り、タオルに何かを包んで戻って来ると、腰を抜かして へたり込んで震えている四郎の前に胡座(あぐら)をかくと、グルグル巻きのタオルを解いてデバ(出刃包丁)を取り出すと、四郎の膝元の畳にブスリと立てた。

四郎の震えはカタカタと大きくなった。出刃が立つ畳に両手を付いて、頭を下げている。和男は、おもむろに自分の上半身の衣服を脱いだ。

「四郎！お前の感は大当たりだよ！ 俺は今からお前を『殺す！』お前は、この出刃で掛かって来い。俺は当然抵抗するぞ！ だが言うておくが、俺には何の武器も無い。でも、俺はここに散らかっている 酒ビンやトックリを使って戦うぞ！

俺は、お前がもっている出刃を奪い取って、お前のメン玉を二つとも 刳り貫いてヤル！これは俺の正当防衛だ。刑法で云えば『緊急避難』の成立だよ。」

「この、『正当防衛』成立は、日頃お前達が勝手に屁理屈を付けて ナンでも押し通している『常套手段だ』よ！

さあ 目の前の畳に刺さっている『出刃』を抜き取って 掛かって来い！」

四郎は動かない。

「馬鹿野郎！ 何をモジモジしている。早く掛かって来い！」

四郎の震えは止まらないし、掛かって来る様子はない。

「じゃあ、分かった！ オマエこの出刃で、指を落とせ！。2本だ。1本は叔父の移民の邪魔をした始末だ。そしてもう1本は俺のオフクロを 無理矢理免職にした『落とし前』だ。

俺は、お前が果たした『仁義』の2本の指を あのアケビのボタ山に埋めてから、東京に帰るつもりだ。」沈黙が続いた。

先刻から 二人の様子を観ていた叔父が口を開いた。

「和(カズ)くん、其れまでじゃ！ 放してやれ。」静かな声だった。

四郎はその場に へたへたと倒れこんだ。叔父は 和男と四郎との間に刺さった『出刃』の前に、胡座をかいた。

「なあ四郎さん 悪かったと思ったら、素直になるもんじゃよ。若い時は誰でも 血気に早って失敗ばすることがある。ワシにも あんたの様な時代があったが、ひよんな事から、容易ならん罪を犯してしもうた。」

叔父は四郎に言い聞かせていると言うよりも、静かに自分の過去を偲んでいるようだった。「あん時、素直になっとれば良かった。わしは それが出来んで、『馬賊』に逃げ込んでしもうた。人間の『裏道(裏街道)』じゃよ。まともな人間の『正義』が通らん世界じゃ。苦しかった。」

和男も四郎も叔父の話に吸い込まれた。

「馬賊仲間が集まると、悪さの自慢話の花盛りじゃ。つまらん事に拍手、喝采じゃ。それが、どうじゃ、独りになった時の後悔と、さみしさ、そして犯罪の累積、酔いが醒めれば『苦しみと不安との』連続ジャよ。」

四郎も和男も叔父の告白に引き込まれていった。

「ワシは馬賊(裏街道)の掟に従って 自分で自分の指を落として(指を詰めて)生まれ変わった人間じゃ。」と 1本の指が足りない 掌をさしだした。

和(カズ)くん、指を詰めるのは 裏道の掟じゃ、日の射す道を行く人の仕儀じゃあないよ。それなりの訳があっても、裏を知らない人間が裏の『掟』を使うのはダメじゃ、許されないよ。「ワシは この炭鉱に来て もぐりはじめてから、もう十年になる。気が付くと、もう『老いぼれ』じゃ身体には 石炭の匂いが染み付いておる。」

「……………」

「四郎さん、こう云う機会は 人生に何度もはないもんジャよ。あんた、おふくろサンはいくつにならした？」

「もう直ぐ、六十五になります。」

「こげな、立派な息子を産みながら……………。ほんに 不憫なお人じゃ。」

「……………」

突然叔父は確りとした 青年の様な声を出した。

「いくら石炭臭うなっても、家族を養っている人間は、つようて、頼れる人間じゃあ なけんば デケン！ 四郎さん、アンタは まあだ立派か若モンばい。この老いぼれでん、今からブラジルさん行こうとしよるバイ。あんた達は日本のあしたを担う(になう)大丈夫(若者)ジャよ。一つキバツて、心ば入れ替えて ワシと握手ば してくれんかね！」

叔父は節くれ立った手を 四郎に差し伸べた。

四郎は涙を浮かべながら、服で手を拭くと、叔父の目をシッカリと見て握手を交わした。「この炭鉱はたのみましたぞ！」叔父の目にも光るものが流れている様だった。

和男と叔父は酒場を出た。外は、天山からの ひんやりとした風が流れていた。叔父は「やっぱり、若かモンは 良かナア～！ いつでんヤリ直しが出来る。」と、呟いた。

翌朝 和男は早い時刻に多久駅を出た。駅には四郎が 見送りに来ていた。和男はだんだん遠くになって行く山々の稜線を心に刻みながら、山々に別れを告げた。

<そして60年、目を閉じれば、忘れがたい山々の思い出が浮かぶ。>

(完)